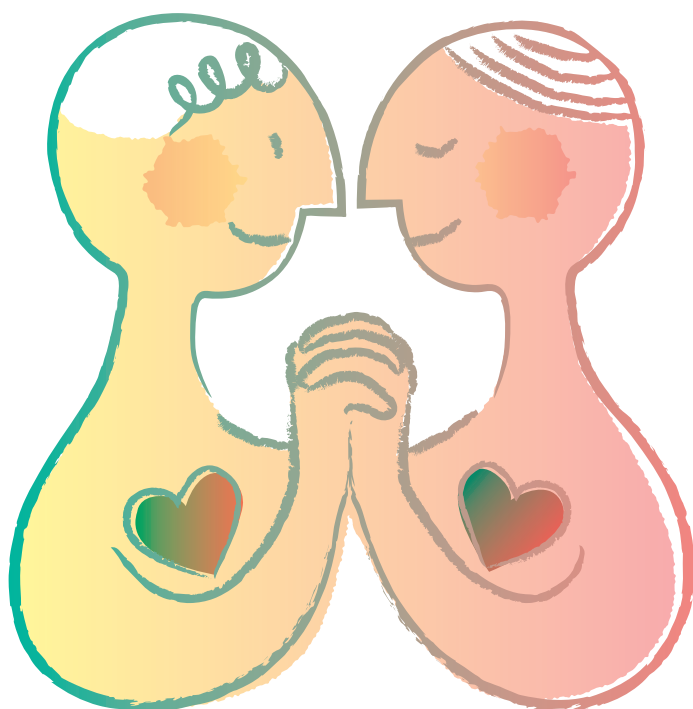


VI

がんサロンで起こり得る 事例と対応のヒント



がんサロンでは、運営者や進行役が対応に悩む場面が多々あることでしょう。そのような時に、どのように対応すればよいのか、そのヒントを提供するのがこの章の目的です。

対応のヒントは、全国のがんサロンで行われている語り合いの場で、どのような対応がなされているのか、多数のがんサロンを訪ねて取材を重ねたうえで作成しました。ここで紹介している対応事例は、さまざまなものがありますが、いずれも実際に行われているものです。

本章は、厚生労働省委託事業「がん総合相談に携わる者に対する研修プログラム策定事業」(平成23～25年度)で作成されたDVDに対応しています。動画の内容は対がん協会のホームページ(www.jcancer.jp/can-navi/manual/pia-s)からダウンロードできます。

DVDでも対応事例について、がんサロンを運営している当事者による解説の中で紹介しています。テキストとは異なる表現方法で、一歩進んだ対応事例を紹介しているので、併せて参考にしていいただければと思います。DVDの解説で紹介している対応事例のエッセンスも、テキストに示しました。DVDで学習する場合は、この部分を参照すると内容の理解の助けになるでしょう。

テキスト、DVD共に「紹介した対応をするとよい」という正解を示すものではありません。また、どの対応がよいという優劣をつけるものでもありません。さらにテキストやDVDでふれていない対応が間違っているということでもありません。

対応に困った時は、各がんサロンの実情に合わせて工夫してください。

なお、ここでは主として運営者や進行役が対応に悩む場面を取り上げていますが、起こっている事態に対して、参加者が傷ついたり戸惑ったりしている可能性もあります。個別の事柄への対応だけでなく、参加者に対する配慮はどのような場面でも大切です。



特定の参加者だけが話をする

話し始めると時間を忘れてしまうことはめずらしくありません。し

かし、限られた時間で行われる語り合いの場で一人の参加者が話しすぎると、ほかの参加者が話をするができなくなってしまう。そこで、多くのがんサロンでは、一人だけが長時間話さないようにルールで定めています。

ただ、そのルールをどこまで厳格に運用するかは、各がんサロンによって判断が分かれています。

1) 対応事例1：話を遮り、ルールを説明する

話が長くなった参加者がいた場合、進行役がタイミングを見計らって「お話の途中ですが」と言って話を遮るのもひとつの方法です。「＊＊さんは、＊＊なのですね」と言って話を受け止めていることを示したあとに、「ほかの方のお話も伺いたいので、いったんお休みして＊＊さんも一緒にほかの方のお話も聴いてみましょう。＊＊さんには、またあとでお話を伺いますね」などと言うとよいでしょう。発言者に配慮しつつも、ほかの参加者にも配慮する必要があることを伝えるのがポイントです。

2) 対応事例2：ルール違反であることを示す合図をする

一人の発言時間に上限を定めて、タイムキーパーがストップウォッチで時間を計測する方法があります。発言時間がオーバーすると、タイムキーパーがうちわを上げるなどして、時間オーバーの合図を送るのもひとつの方法です。うちわが上がったら、発言者は速やかに話をやめるようにルールで定めておき、冒頭で進行役が参加者に説明しておく仕組みです。

ただし、実際にうちわを上げるかどうかは、機械的に判断するのではなく、全体の流れを読んで行うこともできます。どのように運用するかは、スタッフの間で十分に話し合っておくとよいでしょう。

掲げるものがうちわである必要はありませんが、例えばイエローカードよりうちわのほうが、ソフトなイメージがあります。

3) 対応事例3：参加者同士のやりとりに任せ、遮らない

「一人の人が長く話をしすぎないように」というルールを定め、そのことを知らせる掲示や文書を手渡すものの、原則として進行役が参加者の話を遮ることはしないという方法もあります。基本的に参加者が自由に話をしていくフリートーク形式で、進行役が仕切るのは、最初の自己紹介の時だけです。

誰かが長い話を始めると、ほかの参加者が隣の人と勝手におしゃべりを始めることがあります。その結果、いろいろな人がガヤガヤと話す状態になりますが、進行役は自然の流れに任せるという考え方で

その場合は、話せないことで孤立していたり不満そうだったりしている参加者はいないか、などに配慮しましょう。

DVDのエッセンス

特定の参加者だけが話をする対応例

- ・参加者の様子や表情など語り合いの雰囲気をみながら、時にはユーモアを交えつつ話に入ってみる
- ・進行役自ら自己紹介をしつつ、全体のプログラムについて説明するなどの工夫も



発言しない参加者がいる

口数の少ない人に対して、進行役は話をしてもらうように努めるべきなのか、迷うところです。口数が少ないことが悪いというわけではありません。ただし、本当は話したいのに、うまく発言のタイミングがつかめずにいるのかもしれません。

1) 対応事例1：少なくとも1度は話してもらいあとは自然の流れに任せる

語り合いの最初は、自己紹介から始めるところが多いようです。一人ずつ順番に話すので、口数の少ない人も、少なくとも1回は話す機会があります。

その後、あまり発言しない人がいても、無理に指名はしないのがこの方法です。たまたま指名して、発言に消極的な様子の時は、あえて話をしてもらおうとはせず、自然の流れに任せましょう。

2) 対応事例2：話に参加できそうな話題を選んで、ときどき指名する

口数の少ない人に対して、本人が話しやすいと思われる話題の時に、指名して発言を促してみるのもよいでしょう。例えば、口数の少ない人と同じがん種の話になった時や、同じ治療法が話題になった時などに、「* *さんも同じ治療を経験されましたね。振り返ってみて、いまはどういうお気持ちですか」などと話しかけてみるのもよいかもしれません。

そこであまり話さなかった場合でも、何度か話を振ってみるとよいでしょう。口数は少なくとも、進行役として無視しているわけではない、ということを示すことになります。

3) 対応事例3：「聴くだけ」という意思表示をして参加した人は指名しない

受付の時に「聴くだけ」の参加もできることを説明し、意思を確認します。そこで「聴くだけ」の意思表示をした人には、進行役は指名しないという方法です。がんサロンの中には、「聴くだけ」の意思表示を示すカードを用意している所もあります。このカードを首からぶら下げている人には、進行役は発言を求めないという方法を取っているわけです。

ただし、受付時に「聴くだけ」の意思表示をした人でも、後半になっ

てくると、自ら話し出す人もいます。また、最後のほうに「今日は聴くだけということでしたが、ここまでお聴きになって、何か感想はありますか」と発言を促すと、話をしてくれる場合もあります。

DVDのエッセンス

発言しない参加者がいる対応例

- ・話したくないのか、参加したいが話す機会がもてないのかを見極める
- ・話をしたくない場合は、最後に「いかがでしたか」と声をかけてみる
- ・参加者の状況によっては、グループ分けを試みる



参加者間で意見・話題がかみ合わない

がんサロンでは、意見や話題のかみ合わない人同士が同席することもあります。中には口論に発展してしまうこともあります。がんサロンでの会話はかみ合わなくて当たり前という考え方もありますし、意見・話題が一致しないから話し合うことに意味があるという考え方もあります。また、一致できる点を見つけてみようという考え方もあります。

1) 対応事例1：それぞれの考えを受け止める

意見・話題がかみ合っていないなくても、まずは参加者それぞれの考え方を受け止める姿勢を示すのもひとつの方法です。「Aさんはこのようなお考えですね」「Bさんはこのようにお感じになったのですね」などと参加者の言葉を受け止めていることを示すのもよいかもしれません。

2) 対応事例2：異なる意見があることを認め、話題を転換する

意見がかみ合わない時は、「この問題については、いろいろな意見がありますね」とだけ言って、ほかの話題に転換するのもよいかもしれ

れません。

3) 対応事例3：異なる意見について、ほかの参加者に意見を求める

意見がかみ合わない時に、すぐにほかの話題に転換するのではなく、ほかの参加者にも意見を求めて、話題を掘り下げてみるのもひとつの方法としてあるでしょう。ただし、何かの結論を求めるために掘り下げるのではなく、いろいろな人の考えを聴いてみましようという姿勢で臨むとよいかもしれません。

4) 対応事例4：一致できる点、共通の課題を探す

意見・話題がかみ合っていないなくても、一致できる点や共通の課題を探ることができる場合もあります。必ず見つかるとは限りませんが、もし見つかった場合は、一致できる点を確認したり、共通の課題について掘り下げて話し合ったりしてもよいでしょう。

5) 対応事例5：グループに分ける

参加者によってがんサロンに求めていることが違う場合には、グループに分けて対応するのもひとつの方法です。最初からグループに分けることもできますが、休息をはさんで途中からグループに分けることもできます。

DVDのエッセンス

意見や話題がかみ合わない時の対応例

- ・がんサロンでは話題がかみ合わないことはめずらしくない。分かち合いの場として語り合いを進める
- ・話題や参加者の状況によってはグループ分けをする



考えを強く主張し続ける参加者

参加者の中には、医療のあり方やがん患者の生活の仕方などについて、考えを強く主張し続けたり、ほかの参加者に考えを押しつかけたりしてしまう場合があります。

1) 対応事例1：考えを押しつけないように注意する

強く主張している人の考えを否定しないように配慮しながら、段階を追っていねいに対応し、ほかの参加者にその考えを押しつける結果にならないように配慮する方法があります。

まず、強く主張している内容そのものを尊重する態度を示すことから始めるとよいかもしれません。例えば、最初に「あなたの意見は大変重要なことだと思います」といった言葉をかけてみてはどうでしょうか。

次に発言を中断することを促してみるとよいかもしれません。先の発言に続けて「ですが、この話題で少し長い時間を使っています。議論は尽きないところですが、一度ほかの話題に移ってみませんか」といった言葉はどうでしょうか。

それでも発言をやめないなどの場合には、多様な意見があり得ることや、がんサロンの語り合いの場では、結論を出すことを目的にしないことなどを説明するのもよいでしょう。例えば、「確かに重要な話題ですので、お話を続けたい気持ちはよく分かります。ただ、これについては違う立場や考え方もあるようなので、いまここで簡単にこうすべきだと結論づけないほうがよいかもしれません。まだお話しされたいというお気持ちでしたら、この語り合いのあとで、あらためて伺うということにしませんか」などと話してみるのもひとつの方法です。

2) 対応事例2：グループに分ける

考えを強く主張し続けている参加者の意見そのものを変えることは

できない場合もあります。複数の参加者が違う考えをお互いに強く主張し続けるために同じ話題が繰り返されるような場合は、考えの違う人の同席を避ける形でグループに分けて対応する方法があります。

語り合いの途中で休息をはさみ、再開する時にグループに分けることもよいでしょう。

がんサロン開催前に、同席を避けたほうがよいと思われる参加者が分かっている場合は、最初からグループに分ける方法もあります。

なお、参加者同士の主張がぶつかり合ったことを進行役の人が自身の不手際と考えてしまうことがあります。しかし、参加者同士の主張がぶつかり合うことは、いろいろな人が集まるがんサロンの語り合いでは時に見られることで、進行役の不手際ではありません。

DVDのエッセンス

考えを強く主張し続ける場合の対応例

- ・まずは考えを受け止めてみる
- ・「アドバイスは負担になります」といったルールを紹介してみる
- ・進行役は不安に思ったり心配したりする必要はない



感情を強く表す参加者

参加者の中には、感情が昂って、それを強く表す人がいます。ふだんの生活の中では、つらい想いをぶつける相手がいないなどの理由により、がんサロンで号泣してしまう、といった光景はしばしば見られます。また、誰かの悪口が止まらなくなってしまう、といったこともあります。

1) 対応事例1：思い切り感情を表に出してもらい、全員で共有する

参加者が泣き出してしまっても、その想いを全員で共有できると進行役が判断したら、あえて泣きたいだけ泣いてもらうのもひとつの方

法です。

泣いた人がみんなの前で泣いたことを後悔しないように「泣いていいですよ」といった言葉をかけるとよいでしょう。

状況によっては、隣の席の人が背中をさすったり、肩を抱いたりして、自然にサポートしてくれることも多いようです。ただし、異性が体に触れることをいやがる人もいますので、進行役やスタッフはその点を頭に置いて、臨機応変に対応する必要があるかもしれません。

泣いた人の抱えている問題について、どのように考えるのか、その後の語り合いのテーマに取り上げるのもよいでしょう。がんサロンで泣けたことで、笑顔で帰ることもあるようです。

また、ほかの参加者にも気を配りましょう。他者の動揺に反応して気持ちがつらくなっている参加者がいるかもしれません。

2) 対応事例2：個別に対応する

参加者の感情が昂ってしまい、その想いを全員で共有するのは難しいと進行役が判断した時は、いったん部屋の隅に席を移してもらうか、別室に案内して、スタッフが個別に対応するとよいでしょう。

悪口が止まらなくなるような場合も、個別に話を聴いたほうがよい場合があります。特定の人悪口について、がんサロンの語り合いの場でテーマとして扱うのは難しいからです。

このような場合に対応できるように、進行役とは別に、ほかのスタッフががんサロンの場に待機するか、語り合いに参加しているとよいでしょう。

なお、感情が不安定な参加者の場合は、医師や心理職、看護師、相談支援センターの相談員などの医療者に紹介したほうがよい場合もあります。

専門家による心のケアについて

心のケアは、精神科医や心療内科医、公認心理師もしくは心理士が専門家として行ないます。緩和ケア医や、心の問題を専門に扱う看護師、ソーシャルワーカーなども、心の相談に対応することがあります。また、精神腫瘍医はがんに関連した心の問題のケアを専門に扱う医師です。精神腫瘍医が、一般的な精神科医や心療内科医と大きく違う点のひとつは、がんやがん治療、がん患者の心理（例えば再発の不安など）や、家族の心理、あるいはがん医療において問題になる特徴的な心の負担（例えば死の恐怖）について知識と経験があることです。

（参考文献：『平成24年度 厚生労働省委託事業「研修テキスト がんピアサポーター編～これからピアサポートをはじめる人へ～」』）

DVDのエッセンス

感情を強く表す参加者への対応例

- ・参加者の様子を見守り、参加者を受け止めることを基本にする
- ・本人に想いを確認し、テーブルを離れたり、別室に移動したりしてみる



治療や病院の選択に関する話題

治療や病院の選択に関する話題は、がんサロンで取り扱いの難しい話題のひとつです。参加者の多くがこの話題に関心をもっていますが、治療は一人ひとり異なるもので、簡単にアドバイスできるものではないからです。

がんサロンに初めて参加する人の多くが、自分の受けている治療、あるいはこれから受けようとしている治療が適切なのかどうか、大きな関心をもっています。また、どこの病院で治療を受けるとよいのかについても、情報を求めています。

一方、すでに治療を受けている人や、以前に治療を受けた人の中に

は、医療者や医療機関への不満や悪口を言う人もいます。

しかし、がんサロンでは特定の治療法、医師名、医療機関名を挙げて、その良し悪しについて話をしないほうがよいでしょう。医師や医療機関との信頼関係が崩れると、患者に不利益になるかもしれません。また、病気については一人ひとり状況が異なり、一概にどのような治療法が良いかとか、どこの医療機関が良いか、といったことを決めることができないからです。

治療や病院の選択については、国立がん研究センターがん対策情報センターの「がん情報サービス」を紹介するなどの情報提供にとどめるのがよいでしょう。

1) 対応事例1：ルールを定めて、逸脱があれば発言を遮る

医療機関や医師について、個別の批判を行わないようにルールを定めておく方法があります。参加者の発言が、このルールから逸脱していると進行役が判断した時は、発言を遮り、ルールを説明して、話題を変えます。

2) 対応事例2：ひとつの意見として聴くが、同調はしない

医療機関や医師について、個別の批判があったり、特定の治療法の良し悪しに関する発言があったりしても、発言を遮ることはせず、その人の意見として聴きます。

ただし、「いまのお話は、**さんのご意見として伺いましたが、この会としての意見ではありません」と話し、同調しているわけではないことを明確に示すとよいかもしれません。

3) 対応事例3：個別相談に切り替える

医療機関や医師について、個別の批判があったり、特定の治療法の良し悪しに関する発言があったりした場合、発言を遮り、「そのお話は終了後、個人的にお話ししましょう」と言って話題を変えるのもひとつの方法です。

DVDのエッセンス

治療や病院の選択に関する話題への対応例

- ・相談ができない、コミュニケーション不足、孤独や不安などの状況にも気配りを
- ・治療や病院への意見が、ほかの参加者の不安にならないような配慮



がんの再発や死に関する話題

がんサロンの関係者が対応に苦慮しているのが、がんの再発や死に関する話題への対応です。がんサロンという性格上、この問題は避けて通れません。対応方針について各がんサロンで十分に話し合っておくとよいでしょう。

1 再発に関する話題

再発に関しては、①いったん治療は終えたが、再発への不安を強く口にする人、②再発を告げられたばかりの人・再発して治療中の人、③再発して「もう治療法はない」と告げられた人などがいます。参加者の状況に合わせた対応が必要となるでしょう。

なお、以前から継続して参加している場合などでは、誰がこのような問題を抱えているか事前に分かっていることもあります。しかし、語り合いが始まってからこうした問題を抱えていることが分かる場合もあります。後者では、進行役の臨機応変な対応が必要になることもあります。

1) 対応事例1：語り合いの話題のひとつにする

がん治療は終了したものの再発の不安を抱えている人は少なくないでしょう。その中でも、再発の不安を強く口にする人もいます。

語り合いの話題として取り上げ、ほかの参加者の話を聴く機会を設けるのはひとつの方法です。どのようにしてその不安な気持ちを乗り

越えたのかを語る人もいれば、同じような不安を語る人もいます。そうした話を聴くことが、参考になると思われます。

2) 対応事例2：再発経験者のグループで語り合う

再発経験者のグループをつくり、そこで話を聴いたり、それぞれの人の体験談を話してもらったりするとよいでしょう。

なお、対応事例1、2の場合、不安を訴えた本人はもちろん、ほかの参加者も不安な気持ちが高まる場合があります。語り合いが終わったあとに、口数が少なくなったり、涙ぐんだりすることもあるようです。参加者の様子を見て、個別に声をかけて話を聴くとよいかもしれません。不安を訴えた人に対して積極的に支えるような発言をしていた人でも、傷ついている場合があることに留意しましょう。

3) 対応事例3：再発経験者が個別に話を聴く

再発を告げられたばかりの人が、気持ちの整理がつかないまま、がんサロンに駆け込んで来ることがあります。このような時、再発経験者が個別に話を聴く時間をもつ場合もあります。

4) 対応事例4：経験豊富な人が個別に話を聴く

「もう治療法がない」と告げられた患者・家族などへの対応は、一般のがんサロンの参加者には荷が重いと考えられます。全員で語り合ったり、グループで語り合ったりするのは難しいでしょう。がんサロンの運営経験豊富な人や、経験豊富なスタッフが、個別にじっくりと話を聴くとよいかもしれません。

話を聴きながら、例えば、患者本人がこれからの生活の中で自分にできることを見つけられるように一緒に考えていく方法もあります。

ただ、話を聴く側は意見の押しつけにならないように、また話を聴く側が困難を抱え込まないように注意することが大切です。

5) 対応事例5：専門の窓口を紹介する

相談を寄せる患者自身、あるいは家族が症状を十分に理解していな

場合があります。まずは、患者を治療している主治医と相談することを促しましょう。そして治療を受けている医療機関に相談対応窓口があるかないか、どのように相談をもちかけるかなどを一緒に考えたり探したりしてみましょう。

医療機関の対応などに患者や家族などがどうしても納得できないと訴える場合や、再発に関して強い不安を訴える人の場合は、医師や心理職、看護師、相談支援センターの相談員などの医療者を紹介するとよいでしょう。

「もう治療法がない」と判断された人の場合、退院を勧められて家族が困り、がんサロンの運営者などに相談することもあるようです。緩和ケア病棟やホスピスなどに入る場合は、その施設のスタッフが専門的なケアにあたってくれると思われます。在宅で生活する場合は、訪問看護や介護のスタッフがチームを組んで生活を支援してくれるので、前記の専門家の窓口のほかに、訪問診療をしている医師の情報を伝えたり、在宅での生活をサポートしてくれる地域包括支援センターを紹介したりするとよいでしょう。

なお、医師や医療機関などを紹介する場合には、それまでの主治医と紹介先の医師がきちんと連携できるように、紹介状を書いてもらうように勧めるなど、慎重な対応が必要です。医療者から患者・家族やがんサロンに対する不信感をもたれないようにすることが大切です。

2 参加者の死に関する話題

がんになったからこそ、死について真剣に話をしてみたいと考える人もいます。一方で、参加者の中には「死を意識するような話題を取り上げないでほしい」と考える人もいます。特に、いままさに治療に取り組んでいる人にとって、死に関する話題は抵抗があるかもしれません。死に関する話題は、がんサロンでの取り扱いが難しいと考えられています。亡くなったことを運営者やスタッフは知っていますが、その事実を参加者にどう伝えたらいいのか、戸惑うことはしばしばあります。

1) 対応事例1：隠さないで語り合う

がん患者の集まりである以上、亡くなる人がいることは避けられません。隠さないで話すこともあります。

2) 対応事例2：質問を受けた場合だけ答える

亡くなった人がいても伝えないことを原則とし、質問を受けた場合のみ事実を伝えるのもひとつの方法です。ただし、故人の強い遺志で、万一の際は仲間に事実を伝えてほしいと言われていた場合は、語り合いの場で運営者が伝えることもあります。会の冒頭に伝えるか、最後に伝えるかは運営者、進行役、スタッフの間で話し合っておくとよいでしょう。語り合いの場の冒頭に伝えると、場の雰囲気壊れるのではないかと心配する考え方もあります。一方、最後に伝えると、重い気持ちで帰宅することになるかもしれないので、冒頭のほうがよいという考え方もあります。

3) 対応事例3：目の前にいない人のことは話題にしない

日頃から、「いま、ここにいる人のことだけを考えましょう」という方針を掲げる取り組み方です。がんサロンにその日参加している人のことしか話題にしないことを徹底するわけです。亡くなったわけではなくても、その日その場にいない人のことは、話題にしないという方針を貫きます。

この考え方のもとでは、「**さんは、今日はどうしたのかしら」という会話はなされません。その「**さん」は、その場にいない人なので、話題にすべき対象ではないことになります。結果として、亡くなった人のことが話題になることはありません。

3 遺族にどう対応するか

がんサロンには遺族が参加している場合もあります。遺族への対応、参加者と遺族の関係への配慮も難しい問題です。どのように対応するか、各がんサロンで話し合っておくとよいでしょう。

がんサロンに初めて参加した時に、すでに遺族である場合と、最初はがん患者の家族として参加していて、途中で遺族になった場合があります。

遺族だけの会がある場合は、そちらを紹介すればよいでしょう。遺族だけの会がない場合、がんサロンの参加者として、そのまま受け入れるか、あるいは参加を遠慮してもらうか、判断が難しいと思います。

がんサロンには、再発を知らされて大きな不安を抱えている人などもやってきます。そのような人と遺族を同席させることに抵抗を感じるがんサロンの関係者は少なくありません。進行役も再発で大きな不安を抱えている人と、遺族が同席している場で話をするのは難しいと感じるかもしれません。

がんサロンに参加していたがん患者が亡くなって、家族が語り合いの場に「これまでありがとうございました」と挨拶に来ることもあります。この場合も、がんサロンの運営者は、家族の気持ちをありがたく思いながらも、参加者のことを考えると複雑な気持ちになり、対応に苦慮するようです。

一方、遺族は「がん患者のために何か役立つことをしたい」という強い気持ちをもっている場合があります。また、それまで家族として、がんサロンの運営に多大な貢献をしてきた人に対して、参加を辞退してくださいと言にくい場合もあるでしょう。

これらの事情をふまえて、各がんサロンの実情に沿った対応法を考えるとよいでしょう。

1) 対応事例1：遺族の会を活用する

遺族は大切な人を失った悲しみや孤独感、もっと何かしてあげられたのではないかと自責の念や無力感などを抱えていることがしばしばあります。そこで、がんサロンとは別に、遺族の会をつくっているとところがあります。

また、遺族の会をつくらなくても、遺族だけを集めて、遺族の問題に焦点を当てた語り合いをがんサロンとは別の日に開催するという

方法もあります。

2) 対応事例2：ルールとして遺族の参加を断る

遺族はがんサロンに参加できないことをルールで決めておくのもひとつの方法です。以前から参加していた家族でも、遺族となった時点で参加を遠慮してもらうことをルールで定めることになります。

ただし、例えば両親ともがんで、親の一人は亡くなったがもう一人は存命である、というような子どもががんサロンに参加している場合は、問題が複雑になります。遺族でもあり家族であるともいえるからです。

また、ルール化するといっても、そのルールを明文化して、参加者全員に周知することが適当なのかどうかという問題があります。ケース・バイ・ケースで判断することになるかもしれません。

ルールにより、語り合いの会に遺族の参加を断っているがんサロンでも、レクリエーションやイベントなどには遺族の参加を認めている所があります。また、語り合いの参加者にはならないスタッフとしてのみ、遺族の参加を認めている所もあります。

3) 対応事例3：がんサロンのお手伝いとして参加してもらう

遺族と名乗らず、家族として参加する場合があります。長い間家族として参加してきて、ある時から遺族になった場合などでは、がんサロンですでに強い人間関係が結ばれていることも少なくありません。遺族になった人が、引き続きがんサロンへの参加を希望する場合に、運営者が遺族であることを理由に参加を断るのは難しいかもしれません。

一方、新しくがんサロンにやってきた治療中の人や再発の不安を心に抱えている人などは、語り合いの場に遺族が加わっていることに抵抗を感じることもあります。

そこで、遺族であることをあえては名乗らず、家族として参加してもらう場合がありますが、心の負担になることもあるでしょう。運営

者は参加を希望する本人とよく話をし、参加の仕方や役割について相談するとよいでしょう。「がん患者の役に立ちたい」という遺族の気持ちを尊重し、語り合いの場には参加しないものの、事務作業、広報、イベントの企画・準備などを手伝うスタッフとして協力してもらうこともあるようです。がんサロンごとの事情に合わせて、判断していく必要があるかもしれません。

DVDのエッセンス

がんの再発や死に関する対応例

- ・患者や家族、遺族の思いにも配慮を
- ・進行役ががんの経験者である場合は、負担にならないように
- ・旅立たれた参加者への哀悼の思いも大切に



解決すべき問題を抱えている

がんサロンには、差し迫って解決すべき問題を抱えている人が参加してくる場合があります。例えば、「手術の予定が決まっているが、本当にその治療法でよいのか不安になってきた」といった治療法の選択の問題、「抗がん剤治療を勧められているが、費用が負担できないかもしれない」といった経済的な問題を抱えている場合などです。

1) 対応事例1：相談窓口を紹介

このような場合、がんサロンの場で解決策を伝えることは考えず、がん診療連携拠点病院にある相談支援センターなど、専門的に相談に乗ってくれる窓口を紹介するようにしましょう。

がんサロンでは、がん患者・家族などの参加者同士が語り合うことで、交流したり情報交換したりすることができますが、問題解決を図る場ではありません。

がんサロンの運営者やスタッフの中には、がんの治療について、かなり詳しい知識をもっている人もいることでしょう。しかし、診療の

専門的なトレーニングを積み、個別の患者のさまざまな検査データや既往歴なども把握したうえで診断している医師と同じ立場で助言することはできません。

医学的な問題について間違った助言をすることで、患者に命の危険が生じたり、人生が大きくかわったりする危険があります。また、経済的な問題も、他人には相談しにくいさまざまな事情を抱えている場合があります。このような場合には、がんサロンよりも、専門的な窓口で個別に相談してもらったほうがよいでしょう。

DVDのエッセンス

解決すべき問題を抱えている場合の対応例

- ・ つらさや痛みなど、人に言えなかった悩みを共有する場に
- ・ 体や心の苦痛、経済・社会的な悩みのすべてにがんサロンが対応できるわけではないので、がん相談支援センターや自治体の福祉課などを紹介する